

グローバルβ PPL PBL 発表者一覧（研究概要）

年	No.	Presenter (発表者)	Theme (テーマ)	Abstract (要旨)	発表形式
2	1	中山 きらり	在住外国人にも優しいゴミの分別	米沢市に在住している外国人の悩みの一つである「ごみの分別」という悩みに焦点をおき、彼らの悩みを解決するためにゴミの分別方法動画を制作する。また、この動画を作成することで米沢市の自然環境を守ると共に在住外国人が快適に住み続けられるまちづくりを目指す。	プレゼンテーション
	2	齋藤 千紘	紅花 —世界農業遺産の認定に向けた発信	山形の「紅花」で世界発信のために地域ブランド化する。そして、誰でも食べられるような食品を開発。「紅花」の食品開発で農の価値を発信し、高める。	プレゼンテーション
1	3	青木颯祐 勝見薫 鈴木瑠乃☒	地方における可視化されない外国人の生活の分析と検討	東京や首都圏には多くの外国人が集住するが、地方部にも一定数存在する。地方に住む外国人は、都市部に比べて可視化されにくいと考えられる。地方部に住む外国人は都市部に比べ、日本で暮らす上でより困難など状況があると推測される。その可視化されない外国人がどのような生活を、どのようなコミュニティに属しているのかを明らかにするために、アンケートや生活日誌データを用い調査をおこなった。ほとんどの外国人の生活パターンは、家と職場の往復であるが、子どもをもつ人は比較的行動範囲が広い。結婚している女性は、交友関係の広い外国人・日本人と暮らしており、専業主婦の方も一定数存在した	プレゼンテーション
	4	河井美聖 鈴木愛梨 高橋向日葵 吉田樹里	魅力ある高島の食材の情報発信と学校給食での提供	地方の過疎化や高齢化が進む昨今、地域資源の活用が重要である。高島町には「有機農業」の発祥の地という地域の魅力が存在しており、地産地消の促進と町民の有機野菜を通じた食生活リテラシーの向上により、地域活性化に繋げていきたいと考えた。そのためにレシピ作り、パンフレット作成、中学校での高島の食材についての授業を行った。アンケート調査によると、高島の食材の認知度の低さが見えたため、今後は食材の情報の発信の仕方をさらに工夫し、地域の方々が高島の食材の魅力を伝えたい。	プレゼンテーション

年	No.	Presenter (発表者)	Theme (テーマ)	Abstract (要旨)	発表形式
2	1	伊藤 萌果	有機野菜で多くの人に健康を届ける	山形県高島町で有機農法によって作られた野菜を使用し、レシピを考える。有機野菜の美味しさを伝え、沢山の人が食べてもらうことを目的として考えたレシピをレストランで出していきたい。	ポスター
	2	内海 和真	米沢を学生支援が可能な街にする	現在米沢市に子供食堂は存在するが常時利用できる施設がなく何時でも食べ物や安心出来る場所にアクセス出来る状態とは言えない。そこでどんな時でも学生が気軽に利用でき、自分の存在意義を見いだせるような空間を作り出し学生がいそいそとした生活を送れるようにする	ポスター
	3	遠藤 大聖	米沢市を持続可能なまちへ	米沢市で地域内のコミュニティを形成し、米沢市ならではのゆるスポーツの実施と高校生が考える地域マップの作成を行う。これらの活動により米沢市の魅力を高め、地域内の若者のリターン促進と地域外との関係人口の増加で人口減少へアプローチし、米沢市に住み続けられるまちにすることを目的とする。	ポスター
	4	遠藤 みなみ	地域のエネルギー循環	地域で作ったエネルギーを地域で循環させることは可能なのか、可能にするにはどうすればいいか、それにかかるコストを調査した。	ポスター
	5	大沼 勇吾	コンポストを身近に	今現在、日本の食品廃棄率は世界トップクラスであり、私たちにできることはないかと考えた。しかし、食品廃棄率自体を下げることは難しいと考え、廃棄された食品をどう利用するかにフォーカスした。そこで、生ゴミを堆肥にする装置コンポストというものにスポットをあて、誰もが手軽に生ゴミを堆肥にできる装置を自作したいと思った。さらに自作したコンポストを世間に広めることにより、生ゴミ燃焼の負担が減り、最終的には二酸化炭素削減をも目標とする。	ポスター
	6	黒田 梨々花	未来ある町づくり	人と人とのつながりを深めるために、地域内のコミュニティを確立し、そのうえで地域内の人々にはゆるスポーツ、地域外の人々には地域マップ作成を行う。地域内・外での人と人とのつながりを深める活動を行うことで、主に人口減少問題にアプローチし、住み続けられる町をつくる。	ポスター
	7	小山 優美	インバウンドを獲得するために	米沢市が開始したレンタサイクル事業を促進させ、外国人観光客に「おもてなし」ができるような環境をつくり、地元で誇りと愛着をもてるような取り組みにする。また人口減少によって文化財の継承が難しくなっているため、地元の人だけでなく国内外の人々の手によって文化財を継承し、異文化を理解することを目的とする。	ポスター

年	No.	Presenter (発表者)	Theme (テーマ)	Abstract (要旨)	発表形式	
2	8	佐藤 航河	学校給食のフードロス削減にむけて	学校給食で生じるフードロス削減の方法を模索すると共に、若者のフードロスに対する意識の向上、給食のフードロスの実態を明らかにすること	ポスター	
	9	佐藤 由望	チテングを使って国際支援	アフリカのガーナの布、チテングを使いバックやポーチを作り製品を制作しインターネットで販売してそこで得た売上金をザンビアのテラリングスクールに送ることを目的とし「古着を送る」ではなく現地の産物を「買う」ことで産業を止めることなく支援をする。また、日本にはないガーナの独特な柄の布を使うことでチテングの魅力や文化を伝える。	ポスター	
	10	鈴木 誠也	人に優しく、災害に強い街	介護福祉施設での高齢者避難の現状と課題を明らかにする。また、課題解決のために動きコミュニティの形成も目的とする。	ポスター	
	11	高橋 夕青	高齢者の孤独感を無くすためには	高島町は、だんだん高齢化が進んでいます。その中で、高齢者だけで住むことにより孤独感が生まれるのではないかと考えどうすれば解消できるか考察することが目的とする。	ポスター	
	12	高橋 鷹駿	たいむいずまねーはほんとうなのか	日常生活をお金に換算し、今の生活は経済的な損失を抑えているのかを研究する	ポスター	
	13	高橋 凜	ゲームが学習に与える影響	私たちが普段さりげなくやっているゲーム、基本的にはゲームが勉強に与える影響はなく、むしろ言語能力の低下などの悪影響があげられます。ですがある日、私が授業を受けていると、「ここ、あのゲームで出てきたところだ」という事がありました。そこで私は、ゲームが学習へ与える影響を調べようと思いました。	ポスター	
	14	竹原 築	食を通じてその人の人生を豊かにする	米沢市で有機農法により作られている、有機米を米粉に加工して商品化し、消費者の心と体を健康にし病気の人から一般の人まで幅広い人が食べられ、食を通じて小さな幸せを提供することを目的とする。	ポスター	
	15	田嶋 水晶	有機農法の価値を高める	有機農法の価値を高めることに着目し、ゲンキナを通して価値を高め有機農法の魅力を発信することを目的とする。	ポスター	
	16	長谷川 玲	年代別の人気楽曲の旋律に用いられる音数は景気の変化に係り性はあるのか	各年代ごとのヒット曲トップ10の主旋律の音数を調査することで、景気(ここでは株価などに当たる)との関係性を見出すことを目的とする。また、この結果から考えられる、これからの経済発展に向かうために作られるべき曲の特徴(特に音数の目安)を調査していくことでもある。	ポスター	
	17	樋口 楓	外国籍の方々の美容院利用	米沢市住む外国籍の方々を対象にインタビューを行い困り事を調査したところ、米沢市の美容院の外国籍の方々への対応の課題が明らかになった。本研究では、美容院を利用する際の課題の解決に向けて、非言語コミュニケーションによる外国籍の方々への対応を進める。	ポスター	
	18	眞島 利可子	高齢者の健康感を向上させるために	米沢市内の東部学区に住む65歳以上の高齢者の方が行なっているボランティアやコミュニティに参加し、高齢者の「主観的健康感」を調査し、最終的に高齢者の「主観的健康感」の向上を図れるイベントを開催する。	ポスター	
	19	村山 幸恵	水素自動車の有用性	クリーンなエネルギーによって走る水素自動車の日本における有用性を確かめることを目的とする。	ポスター	
	20	渡部 昂生	規格外品の価値	生産過程で生じる規格外品に着目し、その量を調査し、規格外品の価値を見出すことを目的とする。	ポスター	
	1	21	安達凌太郎 平一輝 高橋蓮 鶴巻ゴードン	山形県米沢市における「ハラルフード」を用いたムスリム対応の一提案と実践	近年米沢市においても外国人が増加している。しかし都市部に比べ、外国人に向けた何らかの対応、例えばハラルに対応する店などがほとんど存在しない状況である。コロナ終息後のインバウンド需要から、今後はより外国人が増加すると推測される。そこで、取組みの一つとしてイスラム文化への対応、ハラルフードの開発と提供について検討した。「道の駅」でのハラルフードを提供は、イスラムの方々をはじめ多くの人へ効果的に周知することが可能だと考え、市役所や道の駅の担当者やメニューや提供方法を検討した。	ポスター
		22	朝一凜 遠藤暖愛 豊野さくら 羽鳥隆太郎	有機野菜に対する高島町民の関心と認識	高島町ではすでに「高島町有機農業推進計画」が実施されているが、さらに有機農業を推進させるために、高島町民の有機野菜に対する認知度や関心度を調査する必要がある。本研究では、高島高校、高島中学校の生徒を対象にアンケート調査を行った。有機野菜について認知度は比較的高い結果となったが、「自分から広めていきたい」などの関心度が低かった。また、有機野菜の定義などが分からず勘違いしている人も多くいた。販売時に高島町の有機野菜であることがはっきり分かるようにしたり、売り方や伝え方に特徴をもたせたりするなど関心度を高める工夫が必要だと考えられる。	ポスター

グローバル・ラーニングの実施

(1) グローカル・ラーニングについて

学校設定科目「グローバル・ラーニング」(1単位)に加え、本校独自の「特設時間」をグローバル・ラーニング実施の時間と設定し、それぞれグローバル α ・ β として実施している。

グローバル α は1年から3年まで合同縦割りで展開し、グローバル β は学年ごとにそれぞれ1年はグローバル基礎 (Project Based Learning)、2年はグローバル演習 (Personal Project Learning)、3年はグローバル発展 (Project Advanced Learning) を行う。

グローバル α はグローバルな社会課題について解決へ向けた提言を行う探究学習であり、グローバル β はローカルな社会課題をテーマとした学校プロジェクトや課題研究に取り組む探究学習である。グローバルな視点での探究学習 (グローバル α) とローカルな視点での探究学習 (グローバル β) を同時並行的に学習することで、3年間を通して、国際的視点と地域的視点の間に同時双方向的な作用が発生し、2つの視点の間を行き来しながら探究的な学びが螺旋構造的に高次に深められていく効果を追究してカリキュラム開発に取り組んでいる。

(2) グローカル α

開発教育をベースとして、課題解決型学習に取り組んでいくこのグローバル・ラーニングは国際人に不可欠な資質・能力を育成する本校の教育活動の根幹をなすプログラムである。毎年PDCAを回しながら、生徒の実情も勘案し、学習内容を体系化し学習計画を構築している。

昨年度は本校の運営指導委員である森田明彦先生からの提案で、「健康な環境に対する子どもの権利を促進するグローバルキャンペーン」に参加することを目標として環境問題を中心にカリキュラム開発を行った。

- 1) 地球市民と SDG s
- 2) 貧困と人権
- 3) 様々な環境問題
- 4) Model Diplomacy
- 5) 模擬国連
- 6) ゼロカーボンシティ推進に向けて米沢市への政策提言



(3) グローカル α 今年度の活動

今年度は昨年度の環境問題での学習の知見を活かし、さらに発展させる形で Oposum (基礎自治体レベルでの低炭素化政策検討支援ツールの開発と社会実装に関する研究) チームとの連携事業として「脱炭素社会の構築と地域課題の解決」をテーマとしたカリキュラムを構築した。

一方で、生徒たちからの幅広い社会課題について学習したいという声もあったため、前期を生徒の興味・関心に合わせたテーマ中心、後期に Oposum との連携事業を展開した。ただし、後期だけでは十分な学習にはならないため、また、学校行事もこの学習と関連させてプログラムを組んだ経緯から、前期

にも適宜必要な授業を取り入れた。

また、後期の「脱炭素社会の構築と地域課題の解決」について、特に、いかにして気候変動・温暖化問題について自分事にしていけるか、より幅広くグローバルな視野からも考えることができるかということ意識して授業内容を検討してきた。実際の授業についてもオンライン会議などを用いながら大学の先生方と意見交換をしながら進めることができたため、生徒の実情や興味関心、理解度に合わせた授業展開が可能になったと思われる。

グローバルα 年間学習活動

導入	地球市民と SDG s SDGS カードゲーム 100 人村 WS
貧困・格差	貿易ゲーム カカオ農園の子どもたち 違いの違い
特別授業 1	バックキャスト思考
特別授業 2	未来カルテ
フィールドワーク	飯豊町 SDG s フィールドワーク
難民	・ 難民疑似体験ワークショップ ・ 日本での難民が抱える問題
食料問題	・ 国連弁当模擬国連（新庄東高校との合同模擬国連） ・ 世界の食糧事情 ・ 模擬国連「2030年の食の安全保障をどう担保するか」 （新庄東高校との合同模擬国連）
温暖化 1	・ 温暖化概要 ・ IPCC 第 6 次評価報告書 ・ 温暖化による様々な影響 ・ 山形県における温暖化の影響
温暖化 2	・ 様々な温暖化対策・政策 ・ カーボンニュートラルシミュレーターで脱炭素を考える ・ カーボンフットプリント（山形大学カロリン先生）
気候変動模擬国連	・ 温暖化対策における国際交渉の流れ ・ COP26 ・ パリ協定 ・ 模擬国連「COP27 予備会議」
未来ワークショップ	・ 未来カルテ ・ 政策の立て方 ・ 情報収集・インタビューなど ・ 政策立案 ・ 政策提言（本日）

(3) グローカルβ 実施報告

グローカルβでは、1年次でPBLを行っている。実際には「食と健康」「多文化共生」「子ども食堂」の3つを学校プロジェクトとして設定している。2年次ではPPLとして、1年次でのグループによる探究学習をベースに、個人での課題研究に取り組み、3年次では2年次の課題研究を英語の論文にまとめるPALを行っている。今年度は新型コロナウイルスの影響により、「子ども食堂」プロジェクトはNPO法人ゆあら代表の竹部氏との協議の結果、中止することとなった。

1年PBL

【「食と健康」プロジェクト】

高島町商工観光課、上和田有機米生産組合、NPO法人和楽茶の間、米沢栄養大学などと協働で、高島町の有機農業の価値について探究する学校プロジェクト。

高島町でのフィールドワーク、インタビュー調査などを行いながら学習を行った。

【「多文化共生」プロジェクト】

米沢市国際交流協会、山形大学と協働で、在住外国人との共生社会を構築する学校プロジェクト。

外国人留学生や国際交流員との座談会やワークショップなどを行いながら学習を行った。

(詳細は別資料)

2年PPL

1年次ではグループでプロジェクト学習に取り組んだが、2年次では、個人が1年次での活動を通して生じた課題や問題意識を掘り下げることでテーマを設定し、米沢市役所、高島町役場、飯豊町役場、米沢市国際交流協会、米沢栄養大学、上和田有機米生産組合などと連携しながら調査、インタビュー等を行いつつ、探究学習に取り組んだ。

中にはその取り組みが評価され、山形県庁にてプレゼンテーションを行った生徒もいた。

一方で、ハワイ研修でのフィールドワークによって、グローバルな視点を持ち、かつ、相対的に日本、地域を捉えながら探究を深める予定であったが、コロナ禍により、研修が中止となってしまった。

2名が文部科学省主催・第1回全国高校生グローカル探究発表会に参加し、また、7名がマイプロジェクトアワードに参加するなど、意欲的な姿勢も見えた。

3年PAL

3年次では前期の学習として、2年次での探究学習の論文を英語にまとめた。残念ながら発信する場がなかったのだが、一部の生徒は英語にまとめるだけではなく、自分の課題研究を意欲的に継続し、ヒアリングやフィールドワークを丹念に行い、考察を深め、その過程で生じた問題意識を大学入試へとつなげた。

グローバルβ PBL 学校プロジェクト

担当 太田 洋希

グローバルβについて

グローバルβは2つの学校プロジェクト、「多文化共生」と「食と健康」で展開した。学校プロジェクトとして探究学習の学習スタイルを体験的に学び、2年時の個人課題研究につなげていくことを目的に展開した。

導入として探究学習の仕方や意義などを丁寧にガイダンスし、食と健康のフィールドワークを2回、多文化共生のワークショップを2回行った上で、各人が関心をもったテーマに分かれて学校プロジェクトを行った。

○スケジュール

日時	内容	成果
4～7月	「探究学習のやり方及び、探究学習の意義について」 探究学習のやり方と、探究学習を行うことで向上する資質・能力を説明した。探究学習のオリエンテーションという位置づけで行った。	探究学習の一通りの学習スタイルを学ぶことができた。 探究学習が進路につながることを認識しながら、意欲を向上させることができた。
5～7月	「食と健康2回のフィールドワーク」 (5/17, 7/6) 「多文化共生2回のワークショップ」 (5/26, 27, 6/23) *全員参加	全員がそれぞれのテーマについて学ぶことで、どちらのテーマにより関心があるのか知る機会になった。 それぞれのテーマにおいて、学校外の方々と関わることで、より質の高い学びを実現することができた。
8月	「食と健康」、「多文化共生」のいずれかのテーマを選択	2つのテーマから選択させる自己決定させる機会を持つことで、探究学習へのモチベーションを維持することができた。
9～2月	「食と健康」、「多文化共生」それぞれのテーマで3～5人グループを編成して探究学習を行った。 詳細は別紙の「食と健康 概要報告」と「多文化共生 概要報告」に詳述	2つのテーマそれぞれに担当教諭がつくことで、生徒の進捗に合わせて指導することができた。

詳細は「食と健康 概要報告」「多文化共生 概要報告」参照

グローバルβ学校プロジェクト PBL 食と健康 概要報告

【フィールドワーク等 概要】

担当：高橋和也、高橋元樹

日付	場所・内容	成果
5月17日(月)	フィールドワーク① 高島町の歴史と文化を知る ・高島町役場 ・観音岩・千畳岩 ・高梨利右衛門酬恩碑 ・瓜割石庭公園石切り場跡 ・旧高島駅舎 ・和楽茶の間にて郷土料理昼食 ・高島町の魅力と課題について	高島町役場商工観光課の協力で、山道を歩きながら歴史について学んだ。石切り場跡では、そこから運び出された石で造られた旧高島駅舎を見学し、旧高島鐵道の役割などについて説明を受けた。 その後、和楽茶の間にて、地元の郷土料理を研究する方々が作った、地元食材を使った昼食をいただいた。薬元米や玄米パスタなど健康食について学びながら試食した。午後は、高島町での食と健康について探究学習を続けてきた3年生の発表を聞き、また高島町への移住者や商工観光課の方々からの話を聞き、高島町の魅力と課題を学んだ。
7月6日(火)	フィールドワーク② 食と健康を考える ・菊地農園ゲンキナ収穫体験 ・野菜の栄養学と試食 ・糠野目生涯学習館 ・グループワーク発表 ・昼食(郷土料理試食) ・「高島未来創造ラボ」ワークショップ	和法薬膳研究所・菊地良一氏の農園にて「ゲンキナ」の収穫体験を行った。畑で育てられた青じそや茎レタスを試食しながら、野菜の栄養について学んだ。栄養価の高い野菜を育てるための堆肥に触れ、実際に発酵熱とその感触を知り、土の大切さを改めて学んだ。 その後、糠野目生涯学習館では振り返りとして各グループ畑で学んだことや疑問に思ったことをまとめて発表した。昼食は、自分たちで収穫した「ゲンキナ」のスムージーやしゃぶしゃぶ、五分付玄米ご飯、12種類の具材が入った味噌汁を郷土料理として試食。午後からは、「高島未来創造ラボ・理想の高島町を創造する」ワークショップを行った。地元で活動する方たちを迎え、高島町の課題を聞きながら、解決してどのような理想の町を作っていくかを話し合った。
10月15日(金)	第1回中間発表	2・3年生、教員からのフィードバックを得た。
11月24日(水)	九里学園高等学校調理室にてゲンキナを学校給食メニューに加えるためのレシピ考案のための調理実習。	ゲンキナを学校給食メニューに加えるために生徒たちが考案したレシピをもとに実際に調理して、見た目、味、栄養バランスなどについて和楽茶の間の我妻さんからアドバイスをいただいた。

12月6日(月)	和楽茶の間にて、生徒たちが考案したレシピをもとに我妻さんに作っていただいた料理の試食。	学校給食にゲンキナを使った料理を加えるために、生徒たちが考案したレシピをもとに、実際に和楽茶の間代表の我妻さんに調理していただいた料理を試食しながら具体的なアドバイスをいただいた。
12月6日(月)	高畠中学校にてアンケート調査と中学生を対象とした食と健康に関する特別授業の依頼。	高畠中学校の清水教頭先生と木村栄養士さんに、研究の概要説明のプレゼンテーションを行い、食と健康に関する意識高揚を目的としたアンケートと特別授業の実施について依頼し、承諾を得た。
12月22日(水)	第2回中間発表	2・3年生、教員からのフィードバックを得た。
12月22日(水)	高畠中学校にてアンケート調査	高畠中学校の清水教頭先生に、アンケートをお渡しし、1年生全員を対象とした特別授業の打ち合わせを行った。
1月14日(金)	高畠中学校にて、中学生対象に、高畠の有機作物の魅力や食の大切さに関する授業	※コロナ感染拡大のため実施できず。
1月31日(水)	高畠高等学校	高畠高等学校の山口教頭先生に、アンケートの依頼をし、ご協力頂いた。
1月	高畠町の農作物販売店に訪問し、有機野菜に関する紹介とアンケートのためのポスターの掲示、および販売者・購入者へのインタビュー	※コロナ感染拡大のため実施できず。

グローバルβ 学校プロジェクト PBL 多文化共生 概要報告

【フィールドワーク等 概要】

担当：太田 洋希

日付	場所・内容	成果
5/25,26	<p>「多文化共生のワークショップ」</p> <p>米沢市国際交流協会の国際交流員でアメリカ出身のタイラー・バートン氏をお招きして、米沢市における多文化共生の現状についてお話し頂いた。</p> <p>まずは、外国人旅行客が駅に降り立ち、スキーを楽しむまでに直面する課題を考えるワークショップを行い、グループごとに発表した。その後、実際にバートン氏が、日本で生活している中で不便に思ったことや、在住外国人が困ることなどを生徒に伝えた。</p> <p>2日目のワークショップでは、外国人にインタビューした困りごと、スキーモニターツアーでのアンケートで指摘された課題を整理した。外国人の困りごとを聞いた後、課題を1つ選び、自分たちができる解決策をグループごとに考えるワークショップを行った。</p>	<p>普段外国人とあまり関わりのない生徒にとって、外国人の存在や外国人の生活について思いめぐらすのは難しい。しかし在住の外国籍の方と直接意見交換を行うことで、米沢に住む上で困りごとについて深く考えることができ、「外国人」「外国人との共生」というテーマについて身近なものとして捉えることができた。</p>
6/23	<p>「在住外国籍の方との座談会」</p> <p>米沢市、置賜地域での多文化共生について考えるため、アメリカ出身の米沢市国際交流員2名、米沢市在住外国人、そして九里学園高等学校に在学している外国出身の生徒3名を交えて、座談会を行った。</p> <p>各グループに外国人が入り、前回のワークショップで考えた質問をしながら、インタビューを行った。6人の外国人との交流を通して、それぞれの外国人が体験した文化の違いや日本の生活で困ったことなどを知り、今後の学校プロジェクトでの課題研究につなげることができた。</p>	<p>前回同様外国人が日本で生活するうえでの困りごとを、より深く考えることができた。さまざまな国籍の方や同じ年代の高校生の参加者と交流することができ、「困りごと」だけでなく、それぞれの国の人々の「考え方」、「習慣」などの文化についても意見交換することができ、参加した生徒は「多様性」について実感することができた。</p>
9～2月	<p>10/15 構想発表</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究目的を設定する際、「テーマ設定の理由・意義(問題の所在)」を「リサーチクエスション」を交えながら明確にすることを徹底的に意識した。また常にデータなどの客観的エビデンスを用いることを意識した。 研究方法, 研究目的 ▶発表に対し、先生方・上級生の助言をいただく。 <p>12/22 中間発表</p> <ul style="list-style-type: none"> 調査内容, 進捗状況を報告した。 	<ul style="list-style-type: none"> 米沢市交流協会と連携し、外国人を対象としたアンケート調査や、座談会の実施、聞き取り調査を行った。 米沢市企画調整部政策企画課、道の駅米沢、母ちゃんの台所と連携し、ハラルフードの弁当・食事の開発や提供について話し合いを進めた。

グローバルβ PPL 2年

担当 松岡 大地

【 令和3年度 PPL（プログレスコース2年） 指導過程 】

時期	内 容	生徒の取り組み	教員の指導
4月	1年次で行った探究学習の考え方を復習しながら、テーマ設定に向けて、ワークショップを行った。(SDGs トレーディングカード)	自分の興味関心と社会課題の重なる部分にどんな課題があるか考える。1年次のそれぞれのプロジェクトを振り返り、課題をまとめ、見直す。	課題研究の進め方について全体でガイダンスを行い、1年次の振り返りとともに、課題をしっかりと捉えるよう促す。
5月	RESAS 地域経済分析システムの教材を使用しながら、地域の人口や産業を学習して、地域課題を洗い出した。また昨年度先輩のテーマをヒントにしなが、各々テーマを考えた。	地域に関する情報を集め、課題を発見する。	RESAS 地域経済分析システムに掲載されている授業を参考に授業を展開した。
6月	芝浦工業大学教授栗島先生と谷田川先生より、「バックキャスト思考」「地域・社会調査の方法」の講義を受講しながら、テーマを考えた。構想発表会として、1・2年生に向けて決定したテーマを発表した。	Google Scholar などを利用し、先行論文を調べ、研究テーマに関する知識を深める。また、上級生の先行研究等があればそこから理解を広げ調査を行う。	講義ごと振り返りを行いながら、テーマ設定の支援をした。
7月	構想発表会を振り返りながら、テーマの掘り下げを行い、リサーチクエスチョンを考えた。3年生や教員のフィードバックを参考に、研究の方向性と調査方法の検討を行った。	先行研究や事例への理解を深め、リサーチクエスチョンの答えとなる仮説を立て、調査、検証を行うための計画を立てる。	リサーチクエスチョンに対して、具体的な仮説が立てられているかどうか、指導する。
8月	夏休みを利用し、研究計画に基づいて、校内外におけるアンケート調査、インタビュー調査、現地調査、ワークショップなどの具体的な研究を進めた。中間発表を兼ねた、京都鳥羽高校とのオンライン交流。	各自、目的をもって調査、実験を行う。外部への協力依頼など、計画に基づいて、予備調査や実験を行う。	生徒と外部との間に入り、協力依頼や具体的なアドバイスを行なう。
9月	夏休み中に行った調査をまとめて、1・2年生に向けてポスターセッションを行った。	聴き手が理解しやすい構成のポスターの作成を心掛けながら、発表準備を行った。終了後はフィードバックをもとにアクションプランを検討した。	ポスターの構成の指導および、印刷などの支援を行った。
10月	中間発表の振り返りを行い、研究を各々進めた。中間発表後より、各々自走し、指導教員に適宜アドバイスを求めながら、進めた。	フィードバックをもとに作成したアクションプランを実行するための準備を行った。	生徒と外部との間に入り、協力依頼や具体的なアドバイスを行なう。
11月	各自調査・研究を進めた。	各自、目的をもって調査、実験を行う。外部への協力依頼など、計画に基づいて、本調査や実験を行う。	生徒と外部との間に入り、協力依頼や具体的なアドバイスを行なう。
12月	冬休み前に中間発表を実施した。各自ポスターを作成して、1・2年生に向けて発表した。	研究結果をまとめ、考察する。各自ポスターに研究内容をまとめ、発表した。	まとめ方と発表の仕方を指導する。

1月	新たな問いを立て、十分な考察を行い、研究内容をまとめる。 研究内容を他者と共有する。 全国発表会。成果報告会。等	内部、外部での発表に備え、研究結果をパワーポイントやポスター形式でまとめる。	生徒の研究内容を相互に発表し合い、アドバイスできるよう促す。
2月	成果報告会に向けて、研究を進めた。	成果発表会に向けての発表練習を行った。	生徒の研究内容を相互に発表し合い、アドバイスできるよう促す。

【 外部発表 】

期日	研究発表会名	氏名	発表内容／結果
2022.1.29	「Global Meetings 2022」 2022年全国高等学校グローバル探究 オンライン発表会	中山 きらり	To realize a foreign friendly society by creating a movie of garbage separation 銀賞 受賞
		齋藤 千紘	紅花 世界農業遺産の認定に向けた発信 銀賞 受賞
2022.1.22	「全国高校生 MY PROJECT AWARD 2021」 地域サミット出場（オンライン） （全国サミットは3月開催）	中山 きらり	在住外国人も住み続けられる街づくり
		齋藤 千紘	紅花 世界農業遺産の認定に向けた発信
		遠藤 大聖	興きたまち置賜
		遠藤 みなみ 村上 幸恵	未来エネルギー社会
		伊藤 萌香	有機野菜で多くの人に健康を届ける
		竹原 築	食を通じてその人の人生を豊かにする
2022.1.25	「目指せ世界農業遺産！紅花振興シンポジウム」 山形県紅花振興協議会主催	齋藤 千紘	生徒事例発表部門 紅花 世界農業遺産の認定に向けた発信

1年次のPBLでは、学校プロジェクトとして「食と健康プロジェクト」「多文化共生プロジェクト」の2つのテーマで探究学習をおこなってきた。（※「子ども食堂プロジェクト」は新型コロナウイルス感染拡大のため中止）「課題の設定」⇒「情報の収集」⇒「整理・分析」⇒「まとめ・表現」の探究プロセスを体験的に学習した。

2年次のPPLでは、原則として1年次の課題を踏まえながらも、それぞれ関心のある問題意識を課題として設定し、個人で深めていく方向で取り組んだ。

テーマ設定をより円滑に進めるため、SDGs トレーディングカードやRESAS 地域経済分析システムを活用しながら、「課題の設定」の方法を学び、自己の問題意識の掘り下げを行った。テーマ設定に関するワークショップを数回行ったが、「米沢の地域活性化」や「外国人が住みやすい米沢市」など、漠然としたテーマ設定になってしまい、なかなか調査まで至らなかった。一方で身近な問題を課題として設定し、スムーズにテーマが決定した生徒もいた。

探究学習そのものに意義を見出せず、主体的な取り組みになかなか結び付かない生徒もいた。しかし、外部人材と積極的にかかわりながら研究を進める生徒も一定数おり、他への前向きな影響を与える場面も多かった。生徒集団全体としては後半、それぞれの力量に合わせた達成感を得ることはできた。

個々の研究ではあるが、生徒同士が相互にアドバイスできるような機会や、他の教員や他学年・外部の生徒から助言を得られるような発表の場を多く設定できた。様々な視点からのアドバイスや高い評価を得ることで、探究学習そのものへの生徒の自己肯定感が上がり、自信と情熱を持って研究を進めることができた生徒が見られたのは成果と言えるだろう。

近年の本校の探究活動の大きな課題として挙げられているのが、リテラシーの側面である。先行研究や事例など文献の読み込みが甘く、ネットの情報を鵜呑みにして研究を進める生徒が多かった。今後の指導の課題である。

令和3年度 地域との協働による高等学校教育改革推進事業 生徒意識調査

回答数 47 (％)

番号	設 問	選 択 肢	1年	2年	3年
1	進路決定に 影響を与えている。	とても思う	38.5	61.1	71.4
		やや思う	38.5	33.3	21.4
		あまり思わない	7.7	5.6	0
		思わない	15.4	0	7.1
2	学力向上に 役立っている	とても思う	53.8	50.0	57.1
		やや思う	38.5	44.4	28.6
		あまり思わない	0.0	0.0	7.1
		思わない	7.7	5.6	7.1
3	受験に役立つと思う (役立った)	とても思う	38.5	61.1	64.3
		やや思う	46.2	27.8	28.6
		あまり思わない	7.7	5.6	7.1
		思わない	7.7	5.6	0.0
4	英語力向上に 役立っている	とても思う	30.8	22.2	21.4
		やや思う	46.2	27.8	50.0
		あまり思わない	23.1	44.4	14.3
		思わない	0.0	5.6	14.3
5	思考力が身についた	とても思う	69.2	66.7	78.6
		やや思う	23.1	27.8	21.4
		あまり思わない	0.0	0.0	0.0
		思わない	7.7	5.6	0.0
6	リーダーシップが 身についた	とても思う	23.1	22.2	50.0
		やや思う	53.8	50.0	35.7
		あまり思わない	23.1	11.1	0.0
		思わない	0.0	5.6	14.3
7	自分の考えをはっきり相 手に伝えたり、相手の意 見を尊重し、建設的に 議論ができる	とても思う	30.8	38.9	64.3
		やや思う	53.8	55.6	28.6
		あまり思わない	7.7	0.0	0.0
		思わない	7.7	5.6	7.1
8	問題発見・解決能力が 身についた	とても思う	61.5	55.6	71.4
		やや思う	30.8	33.3	28.6
		あまり思わない	0.0	5.6	0.0
		思わない	7.7	5.6	0.0
9	チャレンジ精神が 身についた	とても思う	46.2	44.4	57.1
		やや思う	38.5	44.4	35.7
		あまり思わない	15.4	5.6	7.1
		思わない	0.0	5.6	0.0

その他自由回答（1，2年生）

- ・グローバルの活動を通して色々な方向から世界の細かい所まで学べこんなことが出来るのではないかなど実際に行動に移すのは難しいが自分なりに問題意識を持つことが出来た。
- ・地域に貢献でき、地域愛、思考力の向上、議論する力が身につく学習だと思った。
- ・元々探究心が低く最初は自分にこの授業ができるから不安だったけど、探究学習の進め方や課題の見つけ方を授業の中で自然と学ぶことが出来て、研究にも生活全体にも役立っていると感じた。
- ・探究学習を通して自分で考えて自分の意見を発表する力が身についたと思う。そして環境問題や地域の問題を知ったことによって前までは何も意識しないで過ごしていた普段の生活でも意識するようになった。その他、友達どうしや先輩、後輩、地域の人などともお話する機会が増えたので他の人と交流する力もついたと思います。
- ・グローバルの授業を通して世界の様々な問題、(気候変動や貧困など)の意識が変わった。今までは正直他人事だと思っていたものも自分も関係あると思えるようになった。
- ・グローバルの準備等がテスト期間と近かったり、忙しい時がありましたが、グローバルの取り組みによって、反対に意識が向上し、勉強時間も増え、全てのことに前向きに取り組むことができるようになりました。また、グローバルの授業で世界の問題を知るだけでなく、自分の意見を発表してアドバイスを貰ったり、外国籍の方々と交流することで、英語力やコミュニケーション能力の向上に役立ちました。プログレスコースは縦の繋がりが強いので、先輩からアドバイスをいただくだけでなく、1年生にアドバイスをすることで、以前より思考力が身についたと思います。

番号	設 問	選択肢	1年	2年	3年
10	SDG s や社会課題について興味・関心が高くなった	とても思う	69.2	83.3	92.9
		やや思う	23.1	11.1	7.1
		あまり思わない	0.0	0.0	0.0
		思わない	7.7	5.6	0.0
11	SDG s について理解が深まった	とても思う	61.5	66.7	100.0
		やや思う	30.8	27.8	0.0
		あまり思わない	0.0	0.0	0.0
		思わない	7.7	5.6	0.0
12	進んで読書をして、知識や教養を深めるようになった	とても思う	23.1	33.3	57.1
		やや思う	30.8	16.7	42.9
		あまり思わない	38.5	27.8	0.0
		思わない	7.7	22.2	0.0
13	郷土愛が深まった	とても思う	15.4	44.4	64.3
		やや思う	61.5	33.3	28.6
		あまり思わない	7.7	11.1	7.1
		思わない	15.4	5.6	0.0
14	地域の良さを発信したい	とても思う	30.8	61.1	64.3
		やや思う	53.8	33.3	28.6
		あまり思わない	7.7	0.0	0.0
		思わない	7.7	5.6	7.1
15	SDG s を意識して行動するようになった	とても思う	46.2	33.3	57.1
		やや思う	38.5	55.6	42.9
		あまり思わない	15.4	11.1	0.0
		思わない	0.0	0.0	0.0
16	地域の課題や世界の課題の解決に向けて (SDG s 達成へ向けて) 貢献したいと思う	とても思う	61.5	77.8	71.4
		やや思う	23.1	22.2	21.4
		あまり思わない	15.4	0.0	0.0
		思わない	0.0	0.0	7.1
17	自分は社会を変える力があると思う	とても思う	7.7	33.3	50.0
		やや思う	23.1	33.3	35.7
		あまり思わない	61.5	11.1	7.1
		思わない	7.7	22.2	0.0
18	自主的に海外に留学したい	とても思う	38.5	61.1	57.1
		やや思う	23.1	16.7	28.6
		あまり思わない	30.8	11.1	14.3
		思わない	0.0	11.1	0.0

その他自由回答（3年生）

・読書の内容が、経済経営、低炭素社会に関するものなど読書の内容が変化した。食べ物、服に関してその裏側にある真実を学び、価値観や選び方も変わってきた。SDGsを学ぶことにより、当たり前前の生活が当たり前でないことや日常でよく見かけるもの、ことについての価値観を改めることが出来る。持続可能な社会、住み続けられる地球、住みやすい地球にするためにこの学びは最も重要だと考える。

・沢山の人と関わったり、様々な社会問題を学習したことで、知らず知らず自分の中にあつた偏見や固定概念がなくなって、視野を広く見れるようになった。意見を言う前に一回自分の中で考え直して客観的に考えられるようになった。

・地域との協働の授業によって、興味関心に関わらず、幅広い分野に触れることができた。さらに、地域と連携したフィールドワークのような実践型の授業をすることで、新しいことを楽しく学ぶことができ、知識を得ること以上に自らが学ぶ楽しさを実感した。この経験は、これからの社会における問題解決や様々な取り組みに役立つと思った。

・相手の立場になって考えること、相手や環境に変化を求めるのではなくまずは自分自身が変化すること、自分の意見や考えを口にするこの大切さなどを学べた。

・積極的に行動して、自分の意見をしっかり持つようになったと思う
三年間で地域に真剣に向き合うことで、地域課題解決は、課題だけでなく魅力に気づき、自分が地域を好きになることで成り立つと気がつきました。そして、そのプロセスで自分が地域にどう貢献するかを考える力が身につく、自然と身近なところから人のために何が出来るか考え、行動に移すことができるようになりました。地域の課題を地球規模に照らし合わせることで、世界的な課題を自分ごとにする習慣ができました。また、進路を考える際に、自分のやるべきこと、やりたいことが明確になっていた。その目標に向かってどのような進路選択をすれば良いのか、あくまでも大学は目標達成の手段として、自分が納得のいく決断をすることができました。人生で本当に大切なことを得ることができたと思います。



地域との協働による高等学校教育改革推進事業 (グローバル型)

九里学園高等学校



九里学園高等学校
KUNORI GAKUEN HIGH SCHOOL

地域との協働による高等学校教育改革推進事業 グローバル型指定

想・創 まほらディア

世界に誇れる持続可能な置賜を創造する人材の育成

グローバル連携

- Hawaii Global Education Fundation
- NPO法人LOOB
- 埔里高級工業職業学校
- 私立明達高級中学
- Calros Albert High School



運営指導委員会

- 森田明彦：尚絅学院大学名誉教授
- 甲斐信好：拓殖大学国際学部長
- スルトノフ ミルドサイド：東北公益文科大学教授
- 金光秀子 米沢栄養大学教授
- 遠藤直樹 米沢市役所企画調整部長
- 本田勝 JICA東北市民参加協力課長

グローバル・ラーニング 学びの構造

グローバルα

グローバル課題研究

「SDGs」

貧困・格差
難民・移民
食料問題
環境問題

「置賜未来カルテ」

脱炭素×地域課題解決

模擬国連
政策提言

グローバル・ラーニング

知見の相互双方向的応用

グローバルβ

ローカル課題研究

1年 PBL（グループ）
「食と健康」プロジェクト
高畠町フィールドワーク
「多文化共生」プロジェクト
外国人とのワークショップ

2年 PPL（個人）
3年 APL（英語論文）

高大連携
中間発表
外部イベント参加

グローバル・シティズンシップ・プログラム

タレント塾（世界の第一線で活躍する方の講演など）

地球塾（山形大学留学生との協働学習プログラム）

Edge-Next（山形大学人材育成プロジェクト）

グローバルαの成果

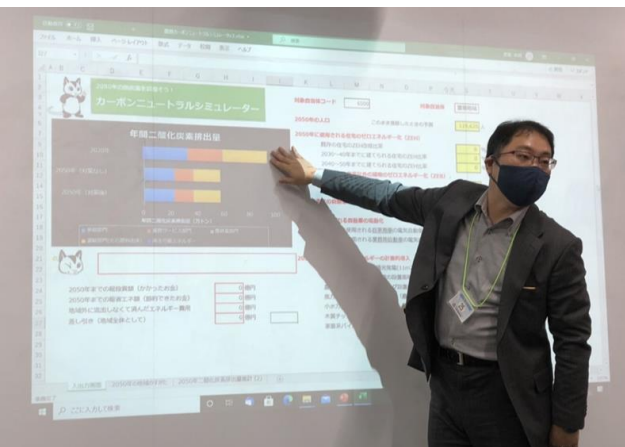
1年間の体系的なカリキュラムの構築

NPO法人IVYやJICA東北との連携

大学との定常的な連携プログラム

グローバルカレンダー

ワークショップ教材の作成（中学校への出前講座）・教員の研鑽と負担軽減・知的好奇心（探究心）
 授業の質的向上・単元の質的向上・他校との模擬国連・教科横断型学習・思考法の獲得・ICTの活用



グローバルカレンダー												
グローバルβ					グローバルα							
週	月日	時間	学習内容・単元			備考	月日	時間	学習内容・単元	備考		
	4月14日(水)	6		1年PBL	2年PPL	3年PAL		4月16日(金)	5・6	LHR		
	4月21日(水)	6	探究とは？探究学習の考え方 各プロジェクト ブリーフィング		SDGsトレーディングカードゲーム	英語論文執筆開始		4月23日(金)	5・6	SDGs入門	導入	
	4月28日(水)	6	探究とは？探究学習のやり方		テーマ決定ワークショップ RESASワークショップ③ 地方のチェンジ・メイカー育成プログラム	英語論文執筆	1年学科検診	4月30日(金)	5・6	授業なし	生徒総会等	
	5月12日(水)	授業なし			地区教研		5月17日 第1回高島町FW	5月7日(金)	5・6	貧困・格差	格差	
	5月19日(水)	6	FW振り返り			英語論文執筆		5月14日(金)	5・6	SDGsワークショップ	SDGs理解(導入)	
5月第3	5月26日(水)	6	多文化共生ワークショップ (横山さん・タイラーさん)			英語論文執筆		5月21日(金)	5・6	カカオ農園	貧困・児童労働	
5月第4	6月2日(水)	6	未来カルテ「バックキャスト思考」 (授業担当者: 栗島) (対面実施予定)				飯島町 SDGsFW	5月28日(金)	5・6	違いの違い	教育格差・人権	
6月第1	6月9日(水)	6	未来カルテ「地域・社会調査の方法」 (授業担当者: 谷田川・栗島) (オンライン実施予定)					6月4日(金)	授業?	特別時間割	組織体	
6月第2	6月16日(水)	6	未来カルテ「釧路地域の2050年」 (授業担当者: 倉坂) (対面実施予定)					6月11日(金)	5・6		難民	人権・平和・共生
6月第3	6月23日(水)	6	外国人との座談会	テーマ・構想発表準備 アクションプランの作成	英語論文 ネイティブチェック期			6月18日(金)	5・6		難民	人権・平和・共生
6月第4	6月30日(水)	授業なし			定期考査			6月25日(金)	5	振り返り		
7月第1	7月7日(水)	6	各プロジェクト振り返り、 プロジェクト選択アンケート調査実施		テーマ・構想発表 クラス内 or 3年生助言者	助言者	7月6日 第2回高島町FW	7月2日(金)		授業なし	定期考査	
7月第2	7月14日(水)	6	アンケート結果より、 プロジェクト決定		テーマ・構想発表振り返り 夏休みのアクションプラン修正	英語論文 ネイティブチェック期間		7月9日(金)	5・6	国連弁当		
7月第3	7月21日(水)	授業なし			全校集会			7月16日(金)	5・6	国連弁当 模擬国連	食糧問題 文化・多様性 国連弁当から食糧問題 まで同じ国を担当	
7月第4	8月25日(水)	授業なし			文化祭準備			8月27日(金)	授業なし	文化祭		
7月第1	9月1日(水)	6	各プロジェクトに分かれて探究開始	アクションプラン実行の振り返り		英語論文提出		9月3日(金)	5・6	食糧問題		
9月第1	9月8日(水)	6	各プロジェクトに分かれて探究	中間発表準備				9月10日(金)	5・6	食糧問題		
9月第2	9月15日(水)	6		中間発表(2年生) (1・3年生は助言者)				9月17日(金)	5・6	食糧問題		
9月第2	9月22日(水)	6		テーマ・アクションプラン発表(1年生) (2・3年生は助言者)				9月22日(水)	1・2	食糧・模擬国連		
9月第3	9月29日(水)	授業なし			修了式			9月24日(金)	5・6	振り返り		

グローバル・カレンダーを軸として授業展開

今年度からの研究主題 = 教科横断型学習 ⇒ 次年度各教科での研究授業
教員研修 = カリキュラム開発専門家（芝浦工業大学谷田川教授）から教育的効果と事例紹介
地域協働推進事業研究開発推進委員内で先行研究

• 地理B

GIS(地理情報処理システム)を用いた授業により、探究学習に必須となる統計や諸資料を参照し、それらの情報を正確に把握し考察できる技能を育成した。また、模擬国連のテーマに合わせ、気候・地球温暖化の概念やその捉え方や、「農業」や「気候」の単元では、自身の担当する国などを中心に資料を参照し、それぞれの諸問題の背景やそれに至るプロセスやメカニズムを明らかにしたりした。

• コミュニケーション英語

Lessonの配列を変更しながら、探究課題に合わせて授業を展開した。例えば、食料問題の探究課題の時には、垂直農法に関するLessonを行い、食糧問題に対する世界の取り組みを英語で学習した。また貧困の探究課題の時には、ベネズエラの貧困問題への対策事例に関するLessonを取り扱った。探究学習である程度背景知識が活性化されているところで導入するため、英語の理解度は高まっている。

• 現代文B

グローバルの単元に合わせ、同じテーマの評論の単元を扱い、小論文で意見を書かせるなど、グローバルでの学びと現代文での学びを融合させて考察を深めさせるように意識した。特に、グローバルでは「議論をする」「意見を述べる」と言った「話す」「聞く」の領域が主となるため、現代文Bでは「書く」ことで考えを整理した。担当者がグローバルの授業を行っているため、意図的にグローバルと比較したり、補足したりしながら生徒の学びを深めるができた。

• 生物

グローバルの単元での学びを深めたり、検証したりする授業を展開した。特に「食糧問題」で扱った遺伝子組み換え作物や、プラスチックゴミの問題など、生物学的な見方や海洋科学技術センターから資料を提供したいたりしながらより科学的根拠をもとにグローバルでの学びができるように授業展開をした。

グローバルβの成果

探究学習のカリキュラム開発

高島町でのフィールドワーク

外国人との座談会

年間計画及び指導体制

計画的に協働でフィールドワークを実施・計画的な国際交流員のWSや技能実習生との座談会
ルーブリック評価・ICTを用いた高大連携・縦割りのゼミ形式体制・対象コース外の生徒への影響

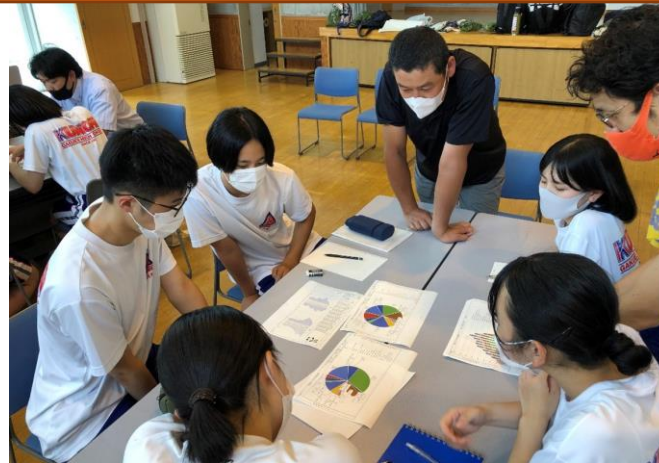


グローバルβの成果

協働体制の強化と広がり と 自走する生徒

個人←グループ←企業・団体←自治体→他の自治体→その地区の企業・団体

生徒の活動の幅の広がり・探究学習の質的向上・積極的に外に出る生徒・外部とのつながり



地域への貢献



県のSDGsフェスタで活動事例発表



地域内の高校へ探究について発表



有機農業の聖人の記録を残す



市のSDGsカンファレンスで活動事例発表



地域内の小学校へ特別授業

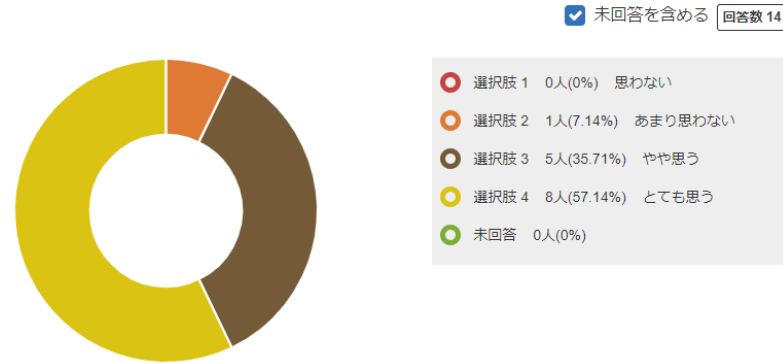


NHKでも探究活動としてとりあげていただきました。

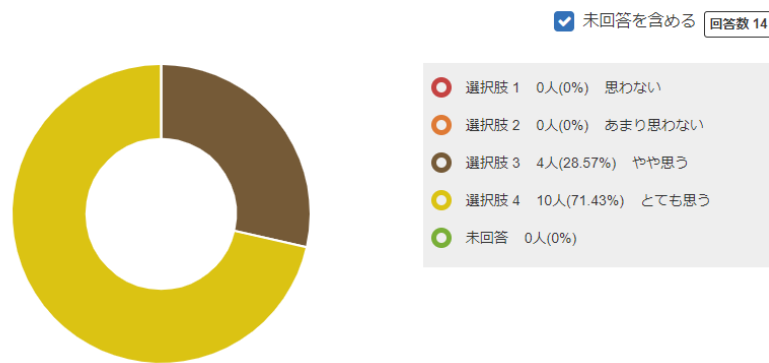


大きな生徒の成長

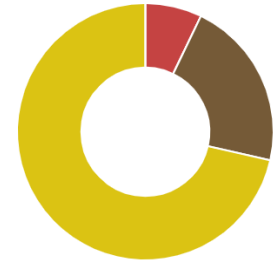
設問 1 チャレンジ精神が身についた



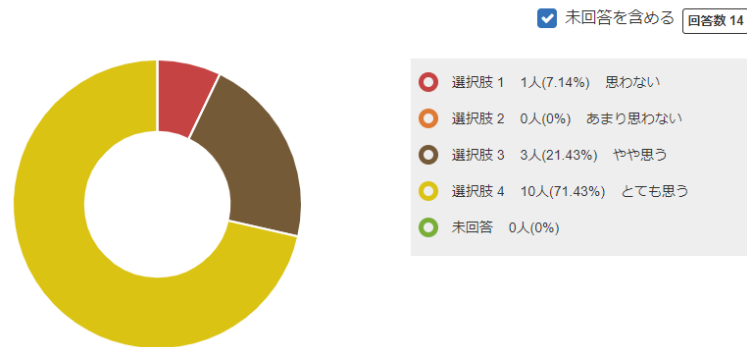
設問 8 問題発見・解決能力が身についた



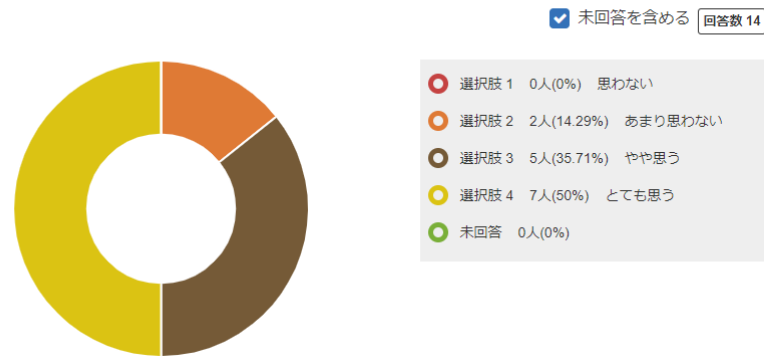
設問 1 進路決定に影響を与えている。



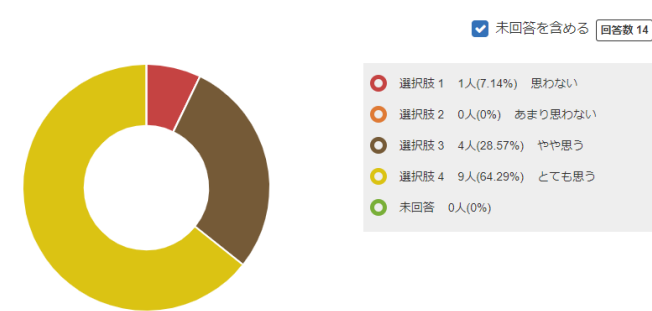
設問 8 地域の課題や世界の課題の解決に向けて (SDG s 達成へ向けて) 貢献したいと思う



設問 9 自分は社会を変える力があると思う



設問 7 自分の考えをはっきり相手に伝えたり、相手の意見を尊重し、建設的に議論ができる



自分が一年生の時は当時の三年生ってすごいとクラスのみんが思っていた。三年生になって、後輩たちにアドバイスを与える立場になった時や、自分達が率先して意見を述べているところが、学習の成長を感じた。

九里でしかできない経験、学びはがあると実感した。高校生らしく勉強する。ではなく高校生らしく勉強し、その学びを実用的なものにするところまで落とし込めるのは九里学園ならではだ。SDGsはもちろん、カーボンニュートラル、子ども食堂、多文化共生、現代においてよく聞くフレーズだかその本質を知る人はそう多くないと考える。その本質を3年前から深く学べたのは自分にとって大きな学びだった。アウトプット、外に発信する力、発信できるまでに探究する力をみにつけたことで大学受験で活用することが出来た。

事業がもたらしたものの

- 地域、世界の中での自分の在り様を意識する
- 情熱をもって自分の探究学習について語る（真正な学びとなっている）
- 生徒の自発的な行動が誘発されている
 - 自己啓発や経営学、地方創生などのオンライン講座への参加
 - 恐れずに積極的に学校の外へ出る
- 外部とのつながり ⇒ 生徒の自己有用感がはぐくまれる
- 地域課題への関心と地域貢献への意欲・自信の向上
 - ⇒ ソーシャルキャピタルの効果
- 社会的関心の高まり
- 生徒の実感としての能力の向上と外部からの評価
- 一般的な学力と言われるものの向上（偏差値の大幅な伸び）

問題意識 × 社会貢献 × 研究 ⇒ 大学選び ⇒ 生き方

参 加 者 名 簿

1	運営指導委員	森田 明彦	尚絅学院大学名誉教授	2
2	運営指導委員	甲斐 信好	拓殖大学副学長	2
3	運営指導委員	金光 秀子	米沢栄養大学教授	1
4	運営指導委員	スルトノフミルドガイド*	東北公益文科大学教授	2
5	運営指導委員	遠藤 直樹	米沢市役所 企画調整部長	2
6	来賓	鈴木 憲和	衆議院議員	1
7	来賓	鈴木 祐介	高畠町役場 商工観光課 ブランド戦略室	1
8	講師	倉阪 秀史	千葉大学教授	1
9	講師	谷田川 ルミ	芝浦工業大学教授	1
10	講師	栗島 英明	芝浦工業大学教授	1
11	講師	宮崎 文彦	千葉大学講師	1
12	講師	北林 蒔子	米沢栄養大学教授	1
13	保護者	倉橋 研人		1
14	保護者	齋藤 姫奈		1
15	保護者	青木 颯祐		1
16	保護者	勝見 薫		1
17	保護者	高橋 向日葵		1
18	保護者	豊野 さくら		1
19	保護者	羽鳥 隆太郎		1
20	保護者	吉田 樹里		1
21	保護者	遠藤 みなみ		1
22	保護者	長谷川 玲		1
23	保護者	石川 舞桜		1
24	保護者	大野 晃		1
25	保護者	我妻 里莉		1
26	一般	本田 厚	富士フイルムBI山形株式会社	1
27	一般	篠澤 美夏	株式会社ナウエル	1
28	一般	我妻 由美子	和楽茶の間	1
29	一般	近野 こみち	和楽茶の間	1
30	一般	須藤 のり子	和楽茶の間	1
31	一般	岸 順一	市立米沢図書館	1
32	一般	中川 広幸	二井宿地区公民館（館長）	1
33	一般	井上 由紀雄	米沢市議会	1
34	一般	成澤 裕史		1
35	教員	寺澤 恵	米沢市立第五中学校	1
36	教員	矢部 寛明	東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科	1
37	教員	成澤 久美	置賜農業高校	1
38	理事	房間正勝		1
39	理事	内藤文徳	上杉城史苑会長	1
40	中学生	石川 陽翔	本校新入生	1

41	保護者	河井 美聖		2
42	保護者	鈴木 愛梨		2
43	保護者	遠藤 大聖		2
44	保護者	佐藤 和香		2
45	一般	相田 隆行	米沢市役所企画調整部地域振興課	2
46	一般	後藤 大樹	米沢市	2
47	一般	本間 弘	株式会社 本間利雄設計事務所	2
48	一般	中村夏帆	東京学芸大学	2
49	一般	栗野真一朗	米沢市役所	2
50	一般	梅津 憲正	公益社団法人山形県観光物産協会	2
51	一般	関場一弘	株式会社シグマ	2
52	一般	北川莉帆		2
53	一般	中村 浩	米沢ロータリークラブ	2
54	一般	芳賀 道也	山形県参議院議員	2
55	一般	山崎 美穂子	本校新入生保護者	2
56	教員	八柳 英子	秋田県立五城目高等学校	2
57	教員	高橋 亮	山本学園高等学校	2
58	教員	武内 博子	東京学芸大学	2
59	教員	齋藤久美子	高島町立高島中学校	2
60	教員	半澤 敦司	伊達市立月館学園小学校	2
61	教員	岩崎 由香子	兵庫県立佐用高等学校	2
62	教員	小寺 由夏	兵庫県立佐用高等学校	2
63	教員	東郷 尚子	新庄東高等学校	2
64	中学生	山崎 桃可	本校新入生	2

※1…会場参加 2…オンライン参加

パネルディスカッション

～地域協働事業がもたらしたもの～

パネリスト



我妻里莉

高畠町の有機農家でのフィールドワークで触れた生きた土に感動し、本当の安心安全で健康な、心も体もおいしく感じる食を知る。そして有機野菜の価値を伝え、地域活性化を図るため、菊地農園、高畠町、大学、企業と協働でミネラル分豊富なゲンキナの6次産業化を目指した商品開発に取り組む。



ゲンキナプロジェクト進行中

外国人との座談会で置賜地域に住む外国人の困り感に共感を覚える。地元南陽市の外国人技能実習生へのヒアリングを何度も行い、在山形ベトナム協会、南陽市役所、企業と協働で防災について学ぶワークショップを行い、外国人も住みやすい町にするにはどうしたらよいかを考えた。



石川舞桜

グローバルで日本の相対的貧困について知り、子ども食堂の意義を考えた。そこで、実際に仲間とともにNPO法人ゆあらと協働で数回子ども食堂を開催し、持続可能で理想的な子ども食堂の在り方を模索した。すべての子どもたちにとっての「居場所」となる子ども食堂を開くことを志している。



齋藤兼信

高畠町役場 商工観光課

ブランド戦略室ブランド戦略係長

高畠町での探究学習のコーディネーターとして、フィールドワークやワークショップの企画・運営を行うほか、生徒の探究学習の伴走者として生徒の活動をサポートするなど九里の探究学習を幅広く支える。



鈴木祐介

進行役：小笠原直子



NPO法人IVY職員・元JICA東北

九里学園地域協働学習支援員としてグローバルの授業において年間計画の作成に携わる一方で、実際に生徒へワークショップを行ったり、フィールドワークでのファシリテーションを行ったりして生徒の学びを引き出している。